

Histoires de psy（プシのお話） エピソード 8

インタビュアー）今日は。ポッドキャスト番組です。プシの方にお話を聞きます。ここに登場する臨床家たちは、その歩み、出会いを語り、親密で必要な作業に、仕事とプライベートのあいだで必要不可欠なこの結び目に、どうとりかかるのかを明らかにしてくれます。誰かの傷跡を聞くということは、自分の傷跡を考えることをしないでは、成し遂げられません。

「プシのはなし」によろこそ。

臨床には何も普通のところはありません。患者たちの叫び声と危機、妄想的な考え、驚き、涙そして個別的な話。それらは怖れと熱狂を生むでしょう。

しかし、臨床とはそれらに限定されるものではありません。ひとりの患者と会うことは決して日常に属していませんし、しかしそれが臨床家の仕事の核です。なぜなら日常に場を与えることは、何も共通のものがないからです。

患者がその日常から、日常していることから、習慣的にしていることから思い起こすことは、重要です。そのようにして日常は臨床にそのまったき場をもつことになります。それは平凡であるようなものとしてではなく、注意深く感覚を鋭敏にすることが問題となるものとして扱われます。たとえ妄想的な危機よりも、おとなしく、印象的ではないことがらだとしても、感覚を研ぎ澄まして扱わなければなりません。

ジャン＝クロード・マルヴァルさんは、特に「普通精神病」の概念を詳細に研究していることで知られます。彼は私をシンプルに家に招いて下さり、自身の歩みを鋭敏な感性と謙虚さをもって伝えてくれます。

レンヌにおいて ECF と AMP の精神分析家として働いておられ、レンヌ第 2 大学の精神病理学と臨床心理学部で教授として勤めておられました。いまはその大学の名誉教授でありますが、彼の風変わりな歩みを振り返っていただきましょう。

プライベートと仕事の面で、もっとも重要な出会いとは何か、彼は語ってくれるでしょう。その情熱的なお話をたっぷり伺いましょう。どれほど「並外れて普通の」臨床が、日常生活のもっとも平凡なところに潜んでいるのか、分かるでしょう。

マルヴァルさん、今夜はお家に迎えていただき、質問に答えてくださりありがとうございます。またあなたの歩みをお話しして下さりありがとうございます。

ちょっとした質問表をすでに送りましたが、それが議論の出発点になりそうですね。とはいえ自己紹介をお願いしますか？最初に心理学もしくは精神分析という語を発見したのは、どのようにしてでしたでしょうか？

マルヴァル) 今日は。私はジャン＝クロード・マルヴァルと申します。今は大学を引退しています。2014年に大学はやめたので、名誉教授も8月に終わります。9年になるかと。でも自分のキャビネで精神分析を実践しています。研究も続けていますし、執筆とか施設での討論に参加などしています。もっぱら長い間、自分の研究の中心にあるようなものについてです。つまりそれは精神病と自閉症です。その両者を区別すること。というのはどういう治療的な作業をすればよいのか、両者を区別することが大事になるということです。両者はかなり別のものだと思われるからです。

自閉症者の治療は精神病者のそれのようにはなされません。それは、私が色々な施設で討論に参加する際に、論じるひとつの点ですね。ですから私が分析家になるというのは、普通の道を借りてではなかったのです。

ところで、私の家族には誰もフロイトの名まえを聞いた人はいなかったです。私の両親は大学の卒業証書はもっていません。ですから私はグラン・ゼコールを出てもいません。医学の勉強もしませんでした。

私はむしろ結構長いこと、学校に興味のない学生でした。ひとつの教科のせいで、5つの異なる学校で退学になりました。当時の私、私の欲望というものが、性的な制止のせいでとても参ってしまっていました。それで勉強どころではなかったのです。思春期の危機にあり、私は女性の精神分析家に、勇気をだして会いに行きました。恥ずかしがりながら『セクシャリティーの理論にかんする3つの小論』という魅力的な題の本をポケットにに入れて、会いに行ったものです。

多くの分析家はそんなふうに証言していますよ。一冊の本を読んだから、と。よくあるのは、フロイトの本と出会ったというものです。もちろん『3つの小論』は私をフロイトのほかの本の読解へも導いてくれました。

インタビュアー) それが精神分析家になりたいという欲望を生み、精神分析と哲学にあなたの関心が向いたのですね。

マルヴァル) そうです。高校のときでした。『3つの小論』は2年生のときに買いました。ですから私が分析家になりたいと思ったのは、個人的な色々な問題に固定されてのことです。神経症の次元の、愛情生活面で、かなり不能になってしまったから、でした。

私はそのことを強調したいと思います。というのは、もし苦しみがないとすると、精神分析をするのは難しいからです。苦しみこそが、分析を始めることを後押しするものでしょう。ラカン是这样子言っていました。「自分をよりよく理解したり他人を理解したりする以外の要求をもたない人たちを導くのだ」、と。

ある種の大学生たちは心理士になるのには多くの場合、あまりに神経症すぎてなれないだろうと、自らのことを思っています。私はそういう彼らには非常に批判的です。というのは、それはむしろチャンスなのです。たぶんその大学生たちは、どのように無意識が自分を決定しているのかを把握するのに、好都合であると言えるでしょう。もちろんそれには条件がありますが。自分について、より多く知ろうとすることです。実践に関わるのに大学の資格免許をとることで満足してしまうなら、かなり不十分です。そのうえ、いかなる免許も、この領域では十分ではありません。

精神分析の諸学派のそれですらも、そう言えます。セラピーを実践するということは、少しそこで自分に実践する許可を与えるリスクを負う、ということです。つねに「保証がない」というリスクです。そこでスーパービジョンへの関心が出て来るでしょう。

私はバカロレアを取った後、パリ大学ナンテール校で1967年に心理学の勉強をしようと思いました。最初の年を終えて、中断しました。というのは心理学部を支配していた科学主義に興味がなかったからです。

精神分析家になりたいという欲望にたいして、哲学の研究は私にはよりふさわしいものに見えました。1968年の2月に分析を始めました。私はナンテール校の大学都市に部屋を得たばかりでした。それから少しして、1968年の5月の出来事（5月革命）が起きました。たぶん少し思い起こさないとならないでしょうね。ナンテール校の大学都市でその始まりがありました。

私は、1968年5月はとても活動的でしたよ。とりわけ3月22日の運動というものがありました。コーンバンディによって始まった運動です。彼はナンテール校の学生でした。

インタビュアー) とても活動的だったとは？どういう意味ですか？

マルヴァル) 私はかなりデモをやりました。大学について起きていたことにはかなり関わりました。組合の人たちは自分たちの戦いと僕たちの戦いを結び付けようとしていて、組合の人にも会いましたよ。

私は1968年の5月の出来事に参加していたので、ある日警察に捕まることになりました。デモの時です。そのせいで精神分析のセッションを一回お休みしてしまいました。でも分析家には支払えと言われました（笑）。

ところで、私の分析家は、学生たちのデモにかなり反対していたのではないかと疑っています。それはその後確かめられました。あの当時それがどのようなものであったのか、私には分かります。あの時は分かりませんでした、後になってから少し・・・。

その仕事については・・・私は自分の分析家がとても学生のデモに反対しているのが分かっ

て、それでそのとき私は彼女と自分の作業をするのを中断しました。それが唯一の理由ではありませんが、辞めた理由のひとつでした。彼女はパリ精神分析学会のメンバーでした。当時、私はまったく物事を知りませんでしたし、様々な学派がある中、どこに自分が位置づけられるのかも知りませんでした。私はパリの BAPU? に行くよう助言されてそうしましたが、それはよい出会いではありませんでした。それだけではありませんが、他にもまったく馬鹿げた解釈があって、そのせいでもありました。

インタビュアー) そのせいでその道にすすむ欲望が取りあげられてしまったのですか？

マルヴァル) いえ、違います。というのは私は本当に、いくつかの症状から自分を解放するために分析をしなければならない、という考えをもっていたからです。だからそれは私にあった分析ではない、悪い出会いだと、彼女は 68 年の出来事に反対しているのだから、と思ったのです。

それでべつの女性分析家を探しました。そしてまたまったく偶然に BAPU で、別の人を紹介されました。それがローレンス・バタイユ（ジョルジュ・バタイユの娘）でした。当時私は彼女がまったく同じオリエンテーションをもっていないことを知りませんでした。というのは、後になって知ったのですが、彼女は FNL を信奉していたため投獄されてしまったからです。ですから彼女により強い転移があったのは、それはおそらく単なる偶然ではありませんでした。

そして彼女はラカンの義理の娘になります。でも当時はまったく私は知らなかったのです。彼女がそうです、ラカン派の分析家であるとは知りませんでした。当時はフロイト派とラカン派の区別もよく分かっていませんでした。私はディディエ・アンジュのような、フロイト派のひとの講義もとても評価していました。

インタビュアー) 最初の年のことですか？

マルヴァル) たぶん哲学科の 1 年目と 2 年目のころですね。そこでは少し心理学もやっていました。もう覚えていませんが、1 年目か 2 年目か。両方だったかもしれません。私はそれらの講義をととても評価して、私をととてもよく形成してくれたと思います。それはたぶん哲学のときかな。いや、心理学のときだと。臨床的な部分がたぶんあり、もうよくは覚えていないと言わないようになりますね。講義のほうは覚えていますよ。

もちろん、当時私はアンジュがエメ（注：ラカンの博論の症例エメ）の息子であることも知りませんでした。その時は大学都市に回っていたテキストがあって、68 年の 5 月のデモ参加者たちが好んで参照していたものです。それはウィルヘルム・ライヒの「若者の性的戦い」、というものでした。そのテキストに自分は夢中になりましたね。あまりに自分はそれに熱狂

したので、哲学の修士論文はこのテーマを選びました。ライヒのフロイト批判です。ピエール・コーフマンが先生でした。当時、彼のことも私は知らなかったのですが。

コーフマンは EFP のメンバーでした。彼はですからラカン派でした。でも私にはその考えはまだ知らなかったのですが、彼のおかげでラカン派に興味をひかれました。そして私が今日明らかにしたくないこと、ではありますが、その修士論文のなかで、私はフロイトに反抗するライヒの妄想的主題を、支持してしまいました。

インタビュアー) なるほど。

マルヴァル) コーフマンはデモンストレーションをしてほしがっていました。まったく問題ありませんでした。私は彼が論文を読んでいたのかも確かではありません。その頃は、ナンテール校の教師たちというのは、それほど学生にたいして要求してくるということではなくて、学生も勉強するよりも闘う活動に参加することで忙しかったのです。

それはこういうことです。それはやはり重要ですね。この修士というのは重要です。というのは、私はライヒについて沢山勉強しましたから。そして少し後になって、彼は偉大な妄想者であると私は気が付きました。それで私は精神病も勉強するようになったのです。

それが精神病研究の入り口でした。というのはパラフレニー型の妄想はかなり興味深いものだからです。それは最後には「ずば抜けて」発達するのです。そして最初は、精神分析が興味深かったです。

とにかく、私は興味をひかれました。博士もやりたいと思ったほどです。でも少したって博士は難しいなと思いました。

当時、70 年代の初めですが、私はカストリアス・ソラニエのセミナーに通っていました。私がそれを好きだったとしても、それは短かったですね。よくそれを理解できたかは分かりませんが、とにかくそれには興味がありました。それで私はラカン派の当時の第 4 グループに向かいました。それも精神分析の団体のひとつで、ラカンの EFP の分裂後に生まれたものです。分裂は 1969 年だったと思います。それで第 4 グループに当時入会願いを出しました。所属したいと思った最初の学派です。

そうしたら私はひとりの男性分析家に受け入れられましたが、彼は「ああ、君が第 4 グループに入りたいと思っているとすれば、それがとてもたやすいと思ったからなんだろう」と言いました。私はそんな解釈には啞然としましたね。考えたこともなかったのですから。私は第 4 グループに惹かれましたが、それはカストリアスの仕事やフランソワ・ペリエの仕事もいいなと思ったからです。それで第 4 グループにいました。

そうです。彼は「第4グループに入りたいなら、とてもたやすいと思ったんだろう」と言いましたが、それはあまり関わりがありません。よろしい。理解することには気を付けなければなりませんね。彼はあまりに多くを理解していましたが、つねに自身のことのよう、物事を理解していました。

当時、ナンテール校の大学都市で、ラカンと分析をしているというひとりの女性の学生と出会いました。その後彼女は精神分析家になりましたが。彼女は今同僚です。私にとってはこの出会いは決定的でした。ラカン派のグループに自分を導いてくれたし、EFPのセミナーのドアも開いてくれたからです。

インタビュアー) その時あなたは哲学の免状をとったのでしょうか？

マルヴァル) 私は1972年に哲学の免状をとって、それは修士号のことですね。

インタビュアー) その後、あなたは分析の学派を探したのですね？

マルヴァル) 同時に、でした。すべてはちょっと一挙にやって来た感じでした。他のことも沢山していましたよ。スポーツなんかも沢山していました。私は分析の費用を卓球を教えたお金で払っていました。結構当時それは高かったのです。

70年代の初めは、活動もしてましたし、沢山のことをしていました。反精神医学の団体でも私は活動していました。その団体はデヴィッド・クーパーの仕事を参照していました。私は反精神医学のコミュニティの創設にすらも参加しました。

インタビュアー) そうですか。なんという名前のですか？

マルヴァル) なんという名前だったかな・・・ブライシュです。名前を思い出しますね。そうです。ブライシュです。ブライシュという名前のちょっとした雑誌も定期的に出していました。でもまあ1年か1年半だけでした。続けさせるのがあまりに難しかったのです。

私は続いてボルド病院に73年にいました。ウーリー医師のラボルド病院のことです。それはかなり記念すべき研修でしたね。そこで私は初めて本当に「狂気」と出会うことになりました。私は、反精神医学の環境にいたし、EFPにいました。EFPにはウーリーもいました。本当にその環境の一部でしたね、あそこは。ですから私は少しそこに属していました。いくつかの偉大な参照がありましたが、ラボルドはそのうちのひとつでした。でも誰が私にそのことを教えてくれたかは覚えていません。

ラボルドでは、「狂気とはしばしばそれほど狂っているのではない」と、教わりました。居

住者と治療者たちの違いというのは、実はそれほどはっきりしていませんでした。そして一方から他方へ移るということも、これまた稀ではありませんでした。

ひとつ逸話を話しましょうか。最初の日のことです。髭をはやした男性がいました。彼は恰幅もよくて、ひとが注目していて、他の人が聞くような告知もしていました。それで私は、彼がウーリーに違いないと思ったのです。

それでその後、私があれば誰ですかと訊いたら、あれはかなりの妄想患者で、自分をキリストだと思っている人ですと教えられたのです。ですから違いはまったくはっきりしていませんでした。その後ウーリーのセミナーに通ったのですが、私にはそれほど刺さりませんでした。

私は一度ラカンのセミナーに出ました。そのあたりの年だったかと思います。というのはその後はランスに住んだので、行くことがあまりできなくなったのです。言いたいのは、私は当時あまり大したことが理解できなかったということです。それはまだ 1972 年のことでしたね。そうですね。沢山の時間が必要だったと思います。ラカンに興味をすごく持ちはじめたと思いますが、それはセミナーでした。苦労しましたね。

私は入るのに時間がいりました。そして 1973 年に、ランスの精神分析によって方向づけられた実験的なチームで、私は臨床家として働きはじめました。それから 2 年して、精神分析を実践することを自分に許可しました。1975 年です。思い切ってラカンにコントロールをお願いしながら、実践に入りました。

その頃私は最初の本を出しました。「ヒステリーの狂気と解離的精神症」、です。当時はよく受け入れてもらえましたが、今日では私自身はそのような受容のされ方を当時の限界とみなしています。というのは、それはその時においての、ヒステリーを拡大したものだからです。それは多くのひとに刺さったということですね。

私の主題は、ヒステリー性の精神病ではなく、ヒステリー的な狂気である、というものでした。当時私はヒステリー性狂気をあまりに拡大適用しすぎました。今日私が書いたこの本をひとに勧めようとは思っておりません。思うに、私の書いた他の本については、今でもちゃんとしていると思いますが、この本については・・・ヒステリー性狂気概念を拡大しすぎました。何人かの人は私に当時そのように言ってくれたのですが、それを理解するには少し時間がいったということですね。

そして私はこの本を出版しました。そしてあちこちに招待されることになりました。大学などにも招かれました。招いてくれたある教授は、私に、どうして心理学の博論が必要ではないのかと聞いてきました。それは思ってもいないことでした。とりわけ、私は哲学科の修士

を取ったので、それが出来るとは思っていなかったのです。彼はそんなことはない、問題ないよと言いました。私は心理学の討論はしたくないと言っても、問題はない、と言ってました。とにかく私は書くことが好きだったから書いたわけです。

ですからなぜ駄目なのか？良いのではないかと考えました。それで結局はこの著作の出版によって、私に扉が開かれたということです。特に、ランスでの精神医学科の大学の扉が開かれ、フェラーリ教授のところで学ぶことになりました。そこで私は心理療法士として入りました。同時に、医学教育機関で、実践をしましたし、医学機関でも、働きました。

(2につづく)